戦争で失った父母と家・戦災孤児の救出

戦争は終わったが、戦争で父母や家を失い、浮浪児化した戦災孤児らの存在が社会問題化した。しかし、生活にゆとりがなく見て見ぬふりの人が多かった。そんな中、ラジオから孤児を扱った「ガード下の靴磨き」「鐘の鳴る丘」の歌やドラマが流れた。戦争で行方不明になった肉親や友を探す「訪ね人」の時間もあった。

孤児たちの光となり、戦後を支えた3人を紹介する。

『愛と勇気の鐘　孤児たちに一生をささげる品川博の愛の奇跡』
藤崎康夫著　くもん出版刊

鐘の鳴る丘」を聞いて・　戦災孤児の父」品川博

1946年（昭和21）珊瑚海のニューアイルランド島から復員した品川さんは、焼け果てた日本と、親を失い、住むところもない戦災孤児の群れにびっくりした。当時、日本には約13万人の戦災孤児がいた。

「鐘の鳴る丘」のとんがり帽子をまねて建設された「少年の家」　藤崎康夫著『愛と勇気の鐘ー孤児たちに一生をささげる品川博の愛の奇跡ー』くもん出版刊

ＮＨＫドラマ「鐘の鳴る丘」はＧＨＱの浮浪児対策からつくられたという。品川さんは、孤児たちに家と教育と職業を確保するために「鐘の鳴る丘」のような「少年の家」をつくった。

戦災孤児のよりどころとなった「少年の家」から多くの子どもたちが救われ、世界へ羽ばたいていった。

戸籍のない子を育てる「ママ」・石綿さだよ

始まりは、飢えた戦災孤児の様子を見ぬふりできず、家で保護したのがきっかけだった。やがて自宅を開放し、1947年（昭和22）戦災孤児の家「愛児の家」を作った。当時106名の子どもの母となり、経済的逼迫が続く中、懸命に育てた。

親を失い自分の名前も知らない子達に戸籍を作り、教育を受けさせ、更生させた。1,000人の戦災孤児を養育し「ママ」と呼ばれ慕われた。

久保喬著『千人の孤児とともに　戦災孤児をそだてた石綿さだよ』PHP刊

「エリザベス・サンダース・ホーム」旧岩崎家大磯別荘につくられた。

混血児の母・沢田美喜

進駐軍の常駐は、日本に新たな課題をもたらした。アメリカ兵と日本人母との間にできた混血児の存在だ。父親がアメリカへ帰国すると、母子は路頭に迷った。特に、黒人との混血児は、世間から冷たい目で見られ、浮浪児化し、社会問題となった。

混血児問題に救済の手を差し伸べたのが、沢田美喜である。実家の岩崎邸を進駐軍から買い戻して、混血孤児院「エリザベス・サンダース・ホーム」をつくった。混血児への偏見と蔑視打破・里親を求めて世界を走り回った。沢田美喜著『黒い肌と白い心』に詳しい。